

熊本労災病院のホームページを訪れていただき、感謝申し上げます。

今年もあっという間に3月になりました。今年は暖冬傾向ですが、やはり春へ移り変わる雰囲気というのは格別です。先日、所用でふるさと新潟に行きましたが、例年の雪は無く、白い山々を遠くに見ながら広大な田園に、はや春の息吹が感じられました。日本全国、飛躍の春はもうすぐそこです。そして、今年が平成最後です。年号が変わる、それだけのことですが、何となく大きな節目に感じます。

春の息吹の他に、3月は8年前から全国民に大きな感慨をもたらします。東北の震災の日、3月11日にまつわる思いです。たくさんの方が亡くなられ、また多くの被災者が、言葉に言い表せない苦難を背負い、今なおそれが続いている現実もあります。被災者のみならず、全国民それぞれが自分のこととしていたみを覚える日々であり続けなければなりません。医療者としても、また特別な思いがあります。

私はあの日、日本小腸移植研究会という小さな全国学会の主催を翌12日に控え、ホテルKKR熊本でその準備会合を始めるところでした。受付にいと、東京大学の先生が入ってくるなり「東京で大きな揺れがあって自宅の食器がガチャガチャだと家内から連絡があった」と大きな声で言われました。急いで館内のテレビをつけて、東北の惨状を少しずつ知り始める事態となりました。東北大学の先生方も来ておられて、仙台空港で車が流される映像をみて、「自分もここに車を置いてきたのに…」と呆然としておられました。翌日の本会も開催どころではありませんでした。国内外から著明な先生の特別講演を依頼していましたが、熊本までとても来れる状況ではありません。それどころか、仙台の先生方の帰路の保証がありません。とりあえず東京まではその日にたどり着いていただきましたが、仙台入りしたのはその後と聞いています。毎年この時期に同じ学会があるのですが、その度にこの出来事を思い出します。

その16年前、阪神大震災があり、私も京都で揺れを経験しましたが、その時にはほとんど組織だっていなかった医療救援体制は、東北震災の時には大きく変わっていたように思います。東北の震災時には熊大病院の院長をしており、旧知の東北大学病院の院長へ3月17日に電話をし、支援受け入れ可能を確認してから医療チームを物資とともに派遣開始しました。医師看護師医療職や事務職も含むチーム編成をして3、4日交代で派遣をしましたが、当初は交通網寸断やガソリンの不足で送り込むルート選定に難渋しました。病院職員全体で

「何でもしよう」という雰囲気は満ちており、派遣希望者はたくさんおられました。その前後で、例えば防災訓練に当たる時の職員の心構えなど、意識は大きく変化したと思います。それは不幸なことながら、熊本の震災時の対応にも十分活かされました。東北の教訓は、全国の医療者に着実に残されていると感じます。

労災病院は全国で30あまりあり、それぞれ災害時の相互救援体制を日頃より準備しており、また、防災拠点としてもDMAT（災害医療派遣活動チーム）の整備はもちろん、食料や水の備蓄、BCP（事業継続プラン）に基づいた医療機能の確保など、行政や医師会とも連動して普段から災害に備えています。国から災害拠点病院の指定を受けている熊本労災病院でも日頃の救急医療対応に加えて、救急・災害診療部が訓練の立案や防災体制整備の活動を行っております。本年度、ヘリポートの利用回数は昨年度の1.5倍となり、病院設置のヘリポートの意義を痛感しています。災害時にも大きく寄与してくれるものと思います。

「災害は忘れた頃にやってくる」といいますが、最近は、地震はもとより、台風や豪雨など、忘れる間もないほどの頻度で襲ってきます。「もしかしたらあるかも」という感覚ではなく、「たぶんあるのでその時どうするか」というリアルな想定を普段から心がけているつもりです。

平成31年度もあと少し、そして、平成の年号もあと1ヶ月と少しだけとなりました。この節目に人生の転換点を迎える方も多いと思います。私は誕生日が年度の終わりにあたっていて、例年この時期が年末よりもさらに時の移り変わりを感慨深く感じ、また、自分や周囲の来し方を振り返る時期となります。私の母はもう95才ですが一人で生活しています。とてもその年まで生きる自信はありませんが、過去を振り返るばかりでなく、もう少し続く自分の将来も少し考える時にしたいと思います。

皆様にとっても、新たな旅立ちや始まりの月、4月は目の前です。これからも労災病院は皆様とともにあります。ご期待のうえ、お元気でお過ごしください。